

田中周友先生御旧邸と夏目漱石滞在関係『毎日新聞』各版記事比較対照表

平成 19(2007)年 9 月 9 日 09 時初稿作成

平成 23(2011)年 9 月 5 日(月)22 時作成改訂稿作成
(誤植補正、構成一部変更等)

〔目 次〕

(参考)本件概要: <<http://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/soseki001.pdf>>

- 1 『毎日新聞』(夕刊)昭和 62(1987)年 10 月 29 日(木)大阪本社版夕? 版及び夕 4 版異同比較(夕? 版: 夕 4 版以前のもの、版数不明) ……………1
- 2 『毎日新聞』(夕刊)昭和 62(1987)年 10 月 29 日(木)大阪本社版夕? 版第? 面 ……………4
- 3 『毎日新聞』(夕刊)昭和 62(1987)年 10 月 29 日(木)大阪本社版夕 4 版第 10 面 ……………5

1 『毎日新聞』(夕刊)昭和 62(1987)年 10 月 29 日(木)大阪本社版夕? 版及び夕 4 版異同比較(夕? 版: 夕 4 版以前のもの、版数不明¹)

(註 1) 本記事は、今一つ確認できていないが、『毎日新聞』東京本社版には掲載されていない模様である。『毎日新聞』(東京)縮刷版には出ていないようである。

(註 2) 下に掲載した記事 2 は、『毎日新聞』(夕刊)昭和 62(1987)年 10 月 29 日(木)大阪本社版夕? 版のものであるが、さる個人御秘蔵の切抜で、同紙全体を見ることができなかつたので、「夕? 版」の版数と面数が確認できていない。

(註 3) 国立国会図書館所蔵の大阪本社版は、未だ確認していない。

(註 4) 例えば京都府立図書館所蔵の同日同紙は、下記 3 の「昭和 62(1987)年 10 月 29 日(木)大阪本社版夕 4 版」であり、その第 10 面に、当該記事が掲載されているが、一部に省略その他があり、内容は(註 2)記事の方がより詳しい。これよりすると、(註 2)記載の版は、おそらく同日の「夕 4 版」以前の版と思われ、この方が価値があると思われる。ちなみに、両版の異同箇所は、※、※※で示した。

(註 5) 大阪本社版夕? 版については、平成 15(2003)年初め頃上山安敏先生の御

¹ 『毎日新聞』夕刊には、夕 2、3、4 版があるようである。(平成 23 年 9 月 5 日追加)

紹介で上記個人御秘蔵の切抜を見せていただき、また、京都府立図書館所蔵の大阪本社版夕 4 版については、初稿作成当時(平成 19 年 8 月 24 日)松尾尊允先生の御示教に与った。ここに、改めて深甚の謝意を表するものである(平成 23 年 9 月 5 日追加)。

(見出し)(夕? 版 ⇒夕 4 版)

夏目漱石の短編「京に着ける夕」 ⇒漱石の短編「京に着ける夕」

舞台は田中・京大名誉教授宅(同じ)

15 日滞在し、作家生活開始 虞美人草の想練る ⇒15 日間滞在し虞美人草に想

(掲載写真)(夕? 版 ⇒夕 4 版)

1 「夏目漱石」の肖像 ⇒写真が差し替わっている。

2 「漱石が半月間滞在し「虞美人草」の想を練った部屋に座る田中・京大名誉教授」なるキャプションの付いた写真) ⇒ほぼ同じであるが、夕? 版での写真の周辺が少しカットされている。

(掲載図版)(夕? 版=夕 4 版)

田中名誉教授宅の周辺図(同じ)

(冒頭説明記事)(夕? 版をベースにし、夕 4 版との異同個所は※、※※で示した。)

(共通個所)

□文豪、夏目漱石が「虞(ぐ)美人草」の構想を練り、本格的な作家生活に入っ
ての初めての作品「京に着ける夕」(明治四十年発表)の舞台は、京都市左京区下鴨
森本町二四の田中周友(かねとも)・京大名誉教授(八七)宅であることが、田中名
誉教授の母親雪枝さん(故人)の日記などから分かった。当時、狩野亨吉・京都帝
国大学文科大学(現京大文学部) 学長(一八六五—一九四二年)が田中家から借り
て住んでいた借家に、親友の漱石が明治四十年三月二十八

※1(夕? 版)

日から十五日間滞在したもので、漱石が作品で描写した敷地や部屋もほぼ当時
のまま残っており、漱石研究で知られる江藤淳・東京工大教授は「この家で漱
石は作家生活へ入る不安を克服した」といい、新発見に注目している。

※※1(夕 4 版)

日から十五日間滞在したもので、漱石が作品で描写した部屋もほぼ当時のまま
残っている。

(記事本文)(夕? 版をベースにし、夕4版との異同個所は※、※※で示した。)

※2(夕? 版)

■「京に着ける夕」は漱石が東京から京都に着き、狩野宅で泊まるまでの半日を中心に正岡子規との思い出を織り交ぜながら描いた短編。田中家は七百年続く下鴨神社の世襲の神職である社家(しゃけ)のひとつ。田中名誉教授の父周道さん(故人)

※※2(夕4版)

■「京に着ける夕」は漱石が東京から京都に着き、狩野宅で泊まるまでの半日を中心に正岡子規との思い出を織り交ぜながら描いた短編。田中名誉教授の父周道さん(故人)

(共通個所)

は、銀行に勤めていて、勤め先に近い京都市中京区二条通高倉に一時、引っ越していた。この間、狩野学長が借りていた。最近田中名誉教授が家屋改築のため書庫を整理したところ、周道さんが明治四十年二月、狩野学長と交わした建家借用証書や、雪枝さんが同年一月からつけていた日誌、メモ類などが見つかった。

借用証書には明治四十年二月二十日の日付と田中、狩野両氏の署名、押印とともに、「賃借料一カ月十八円、敷金十八円で借り受ける」などと記載されている。また雪枝さんの日誌には「本宅借主は狩野氏に決まり……」(二月十七日)「狩野氏が本日引っ越したり」(二月二十日)など詳細に記されている。

※3(夕? 版)

■これまで漱石の日記や書簡などから漱石が明治四十年、旧制一高教師を辞め、朝日新聞社に在宅小説記者として入社、作家生活に入るとともに、京都の狩野学長宅に滞在していたことは知られているが、田中家と狩野学長の賃貸関係ははっきりしなかった。さらに田中名誉教授も両親から漱石の寄宿を知らされておらず、「京に着ける夕」の中に「わが家の寂然たる十二畳」とある部屋が実際は十畳しかなかったこともあって特定出来ずにいた。

※※3(夕4版)

■これまで漱石の日記や書簡などから漱石が明治四十年、作家生活に入るとともに、京都の狩野学長宅に滞在していたことは知られているが、田中家と狩野学長の賃貸関係ははっきりしなかった。さらに田中名誉教授も両親から漱石の寄宿を知らされていなかったこともあって特定出来ずにいた。

(共通個所)

■江藤教授によると、漱石は親友に作家一本の生活の不安を相談したかったのと、最初に入社を勧誘された大阪朝日を断り、東京朝日に入社したことを申し訳なく思って「虞美人草」の冒頭に京のシーンを入れようと取材に京都を訪れたといい、「”京に着ける夕”は漱石作品には珍しく、作者の不安、いらだちがストレートに出ている。ぜひ私も訪れたい」と話している。

※4(夕?版)

■田中名誉教授は「ほとんど家屋に手をつけなかったことが幸いした。漱石ファンの一人として漱石が身近に感じられ、うれしい」と話している。

※※4(夕4版)

(この部分全部省略)

2 『毎日新聞』(夕刊)昭和 62(1987)年 10月 29日(木) 大阪本社版 夕?版第?面
(夕?版: 夕4版以前のもの、版数不明、さる個人御秘蔵切抜)

(見出し)

夏目漱石の短編「京に着ける夕」

舞台は田中・京大名誉教授宅

15日滞在し、作家生活開始 虞美人草の想練る

(掲載写真)

1 「夏目漱石」の肖像

2 「漱石が半月間滞在し「虞美人草」の想を練った部屋に座る田中・京大名誉教授」なるキャプションの付いた写真

(掲載図版)

田中名誉教授宅の周辺図

(冒頭説明記事)

□文豪、夏目漱石が「虞(ぐ)美人草」の構想を練り、本格的な作家生活に入っ
ての初めての作品「京に着ける夕」(明治四十年発表)の舞台は、京都市左京区下鴨
森本町二四の田中周友(かねとも)・京大名誉教授(八七)宅であることが、田中名
誉教授の母親雪枝さん(故人)の日記などから分かった。当時、狩野亨吉・京都帝
国大学文科大学(現京大文学部) 学長 (一八六五—一九四二年)が田中家から借り

て住んでいた借家に、親友の漱石が明治四十年三月二十八日から十五日間滞在したもので、漱石が作品で描写した敷地や部屋もほぼ当時のまま残っており、漱石研究で知られる江藤淳・東京工大教授は「この家で漱石は作家生活へ入る不安を克服した」といい、新発見に注目している。

(記事本文)

■「京に着ける夕」は漱石が東京から京都に着き、狩野宅で泊まるまでの半日を中心に正岡子規との思い出を織り交ぜながら描いた短編。田中家は七百年続く下鴨神社の世襲の神職である社家(しゃけ)のひとつ。田中名誉教授の父周道さん(故人)は、銀行に勤めていて、勤め先に近い京都市中京区二条通高倉に一時、引っ越していた。この間、狩野学長が借りていた。最近田中名誉教授が家屋改築のため書庫を整理したところ、周道さんが明治四十年二月、狩野学長と交わした建家借用証書や、雪枝さんが同年一月からつけていた日誌、メモ類などが見つかった。

■借用証書には明治四十年二月二十日の日付と田中、狩野両氏の署名、押印とともに、「賃借料一カ月十八円、敷金十八円で借り受ける」などと記載されている。また雪枝さんの日誌には「本宅借主は狩野氏に決まり……」(二月十七日)「狩野氏が本日引っ越したり」(二月二十日)など詳細に記されている。

■これまで漱石の日記や書簡などから漱石が明治四十年、旧制一高教師を辞め、朝日新聞社に在宅小説記者として入社、作家生活に入るとともに、京都の狩野学長宅に滞在していたことは知られているが、田中家と狩野学長の賃貸関係ははっきりしなかった。さらに田中名誉教授も両親から漱石の寄宿を知らされておらず、「京に着ける夕」の中に「わが家の寂然たる十二畳」とある部屋が実際は十畳しかなかったこともあって特定出来ずにいた。

■江藤教授によると、漱石は親友に作家一本の生活の不安を相談したかったのと、最初に入社を勧誘された大阪朝日を断り、東京朝日に入社したことを申し訳なく思って「虞美人草」の冒頭に京のシーンを入れようと取材に京都を訪れたといい、「〃京に着ける夕〃は漱石作品には珍しく作者の不安、いらだちがストレートに出ている。ぜひ私も訪れたい」と話している。

■田中名誉教授は「ほとんど家屋に手をつけなかったことが幸いした。漱石ファンの一入として漱石が身近に感じられ、うれしい」と話している。

3 『毎日新聞』(夕刊)昭和 62(1987)年 10 月 29 日(木) 大阪本社版 夕 4 版第 10 面(京都府立図書館所蔵)

(見出し)

漱石の短編「京に着ける夕」
舞台は田中・京大名譽教授宅
15日間滞在し虞美人草に想

(掲載写真)

- 1 「夏目漱石」の肖像:(夕? 版)と写真が替わっている。
- 2 「漱石が半月間滞在し「虞美人草」の想を練った部屋に座る田中・京大名譽教授」なるキャプションの付いた写真:(夕? 版)の写真とほぼ同じであるが、(夕? 版)のもの周辺の周辺が少しカットされている。

(掲載図版)

田中名誉教授宅の周辺図(同じ)

(冒頭説明記事)

□文豪、夏目漱石が「虞(ぐ)美人章」の構想を練り、本格的な作家生活に入っ
ての初めての作品「京に着ける夕」(明治四十年発表)の舞台は、京都市左京区下鴨
森本町二四の田中周友(かねとも)・京大名譽教授(八七)宅であることが、田中名
譽教授の母親雪枝さん(故人)の日記などから分かった。当時、狩野亨吉・京都帝
国大文学部(現京大文学部)学長(一八六五—一九四二)が田中家から借りて住ん
でいた借家に、親友の漱石が明治四十年三月二十八日から十五日間滞在したも
ので、漱石が作品で描写した部屋もほぼ当時のまま残っている。

(記事本文)

■「京に着ける夕」は漱石が東京から京都に着き、狩野宅で泊まるまでの半日
を中心に正岡子規との思い出を織り交ぜながら描いた短編。田中名誉教授の父
周道さん(故人)は、銀行に勤めていて、勤め先に近い京都市中京区二条通高倉に
一時、引っ越していた。この間、狩野学長が借りていた。最近、田中名誉教授
が家屋改築のため書庫を整理したところ、周道さんが明治四十年二月、狩野学
長と交わした建家借用証書や、雪枝さんが同年一月からつけていた日記、メモ
類などが見つかった。

■借用証書には明治四十年二月二十日の日付と田中、狩野両氏の署名、押印と
ともに「賃借料一カ月十八円、敷金十八円で借り受ける」などと記載されてい
る。また雪枝さんの日誌には「本宅借主は狩野氏に決まり……」(二月十七日)
「狩野氏が本日引っ越したり」(二月二十日)など詳細に記されている。

■これまで漱石の日記や書簡などから漱石が明治四十年、作家生活に入るとと

もに、京都の狩野学長宅に滞在していたことは知られているが、田中家と狩野学長の賃貸関係がはっきりしなかった。さらに田中名誉教授も両親から漱石の寄宿を知らされていなかったこともあって特定出来ずにいた。

■江藤教授によると、漱石は親友に作家一本の生活の不安を相談したかったのと、最初に入社を勧誘された大阪朝日を断り、東京朝日に入社したことを申し訳なく思って「虞美人草」の冒頭に京のシーンを入れようと取材に京都を訪れたといい、「〃京に着ける夕〃は漱石作品には珍しく、作者の不安、いらだちがストレートに出ている。ぜひ私も訪れたい」と話している。

(以上)